高岡短期大学紀要　第19巻　平成16年3月
Bull. Takaoka National College, Vol.19, March 2004

教育環境の激変と『高岡短期大学紀要』の役割

学長　西　頭　徳　三

2003年度の『高岡短期大学紀要』は，本学をめぐる教育環境が激変する中で発刊される。高岡短期大学は2003年5月，県内の国立大学である富山大学，富山医科薬科大学と「再編統合」し，その際，短期大学から4年制の「芸術文化学部（仮称）」に生まれ変わることに合意した。再編統合の時期は1年半後の2005年10月であるが，現在，三大学間で新学部創設等について話し合われている。それと並行して，2004年度からの「国立大学法人化」の準備も進めている。

三大学の再編統合は本学創設以来の出来事であり，特に新学部の創設は，本学の教育システムを根本的に改変するものである。新学部構想では，芸術文化学科のみの1学科・5コース制（造形芸術・工芸デザイン・文化マネジメント・デザイン情報・造形建築科学コース）を採用し，学生が複数のコースを自由に選択できる教育体制の構築を目指している。この狙いのひとつは，21世紀社会に必要となる新しい経済・文化価値を創造できる人材の育成にある。もうひとつは地域における具体的な芸術文化活動を担える人材の育成にある。もちろんこの構想は，新世紀の課題が経済重視社会から感性・こころ重視社会へと大転換すべきという意図をベースにしている。さらに国立大学法人化は明治以来の大改革であるが，大学の規模を問わず，いずれの国立大学も限りなく競争的環境に投げ込まれることになろう。

『高岡短期大学紀要』は1990年3月の第1巻創刊以来，巻を重ね，第19巻を発刊するまでに至った。この間，地元と強く結びつき，地元に貢献するという本学の創設理念に照らし合わせて，紀要の編集方針を大幅に見直した。ちなみに第16巻（新シリーズ第1号）より従来の「一般論文」等に加えて，新たに「特集」「公開講演録」「活動報告」等のジャンルを設けて，それに関連する記録を掲載することになった。つまり，高岡短期大学における教育研究活動を詳細，かつ幅広く収集し掲載することで，本学が地域社会からよく見えるように努めた。

2004年度よりの「国立大学法人化」という既定路線に加えて，第19巻の編集過程で三大学の再編統合，新学部創設という新たな事態が発生した。特に，短期大学から4年制学部への移行は，教育研究内容の再構築，地域連携の大幅見直しと同時に，本紀要のあり方，役割の再検討を迫ることになる。

本紀要には，編集方針の見直しを引き継いで，特集「学生の海外研修について」に関する記録をはじめ，公開講演録，活動報告，一般論文，研究ノート，資料等の15論考を掲載した。忌憚のないご批判やご意見をお寄せいただきたい。本編集委員会では，それらを真摯に受け止め，教育環境の激変に対応した本学の教育研究のあり方や紀要の編集方針を再検討する契機・糧としたい。

なお，本学は第18巻発刊の前後に，蝋山昌一学長と産業造形学科漆工芸コースの横山幸文教授という，かけがえのないお二人の先生を失った。蝋山先生は2003年6月19日に，横山先生は2002年11月11日に急逝された。本紀要に，両先生のご功績を称え，ご冥福をお祈りする追悼文（別冊）を掲載した。